リカード賃銀論の考察

松崎　昇

Studies of Wage theory of Ricardo

Noboru Matsuzaki

Ⅰ　本稿の課題
Ⅱ　二重の理論像
Ⅲ　問題意識
Ⅳ　「全体像」

Ⅰ　本稿の課題

人間社会史上特異な媒介期たる近代，この近代の特質は直接的には経済の自立性にある[註①]。近代「社会」の基本的な維持・存続は経済の自己運動として行われる。経済運動自身に自律性があるということがこの点を保証しているのである。経済の自律性は端的にこれを生産の自律性と言い換えることができよう。そしてこの社会的生産を主体的に担い編成しているものが，資本（Das Kapital）なのである。資本の運動を通じて生産の自律的構造が維持・拡大される。客体的な，不可解な近代「社会」を解明しようとする試みは，従って，資本により編成される生産の構造の解明へと集約されてくるのであった。

重商主義的思想に対する根底的な批判として成立したいわゆる古典派経済学

は，近代把握の試みとして，この意味で一つの到達点をかたちづくったと言ってよい。そしてそれは近代把握のすぐれて正統的な流れの最後に位置するものであった[註②]。では，その古典派なかんずくリカードの経済学的体系とはどのようなものであったのか，その理論的な成果と欠陥は何であり，それは何に由来するか。我々は，古典派の頂点に立つリカード，という基本視座において，彼が経済運動の法則性をいかに捉え解明したかを，リカード経済理論体系（以下，リカード体系と略す）の論定と評価，という課題のもとで解明していきたいと考えるのである[註③]。

リカード自身は，三分配分の対比的な長期動向の論定を体系的研究の眼目としていたと言ってよい。また，究極的には，利潤率をメルクマールとする経済成長論を論じた，とも言えそうである。この場合研究の主眼は利潤率の(長期)動向におかれていると言えよう。ともに分配論・長期動態論といった視点が強い。だがそういう諸概念・諸カテゴリーの駆使を通じて，彼は事実上経済の仕組み，なかんずく生産の仕組みを説いているとみるべきではないか。マルクスが「近代的生産をその一定の社会的仕組みにおいて把握することを問題とした，そしてすぐれて生産の経済学者であるリカード」《K. Marx., Zur Kritik der Politishen Ökonomie, MEW 版 Band. 13: S628. 武田他訳，岩波文庫版307頁》と評し，内田義彦氏が（古典派について）「一の完結した再生産の体系」（内田 94頁。[本稿末尾の文献一覧参照，以下同]）と言い，吉沢芳樹氏が（スミスおよび）リカードに「生産機構の科学的分析」，「構造分析」（吉沢① 174, 180頁）を見るのもこの点を示すものと思われる。従って，リカード体系の論定と評価をめざすにあたって，まずなによりも，彼が資本と賃労働との関係をいかなるものとして捉えていたか，が核心的に考察されねばならないのではないだろうか。この関係こそが自律的な生産の維持・拡大の根拠，生産の関係の核心であると考えられるからである[註④]。彼はその点を<労働商品>論として

展開する。従って意義も限界もこの点をめぐって検出されるであろう。

リカードは1815年に『穀物の低価格が資本の利潤に及ぼす影響についての試論』を刊行したが，その後二年足らずのうちに『政治的経済学および課税の諸原理について』（以下『諸原理』と略す。初版1817年，第二版1819年，第三版1821年）を出版した[註⑤]，彼の主著である。『諸原理』は三部分に分かれており，第一章から第七章までの全七章が＜経済理論諸章＞をなす。資本と賃労働との関係は第五章「賃銀について」が主題として扱っているとみてさしつかえないであろう。従って我々はリカードの賃銀論を解明していくことを通じて当該論点を考察していくことになる。

だが第五章には固有の問題があることをあらかじめ述べておかねばならない。難解を誇る経済理論諸章のなかでも，理論的にみて，本章は特に混乱していると思われる，という点がそれである。それゆえ我々は第五章構成を整理し，一定の内在的な処理を経て，リカード賃銀論の本来的な理論像とでもいうべきものを再構成するという手法をとらざるをえなかった。これによってリカード本来の賃銀論が透徹した姿でつかめるようになるのではないかと考えられる。ところが他方で，かかる論理的な追究ではどうにも割り切れぬ＜何か＞が残ってしまう感を拭いえない。リカードは何故，のちに見るような，混乱というしかない叙述を敢えてなしたのか。彼は，自己本来の論理では説明しきれない，だが何とか説明したい＜問題＞を議論しているのではないだろうか。我々はこの点を追究することを通じて彼のそこでの問題意識の意味すなわち意義を探る。そしてそれが，本来の理論像の論理の枠組みの欠陥を激しく告発していることをみる。それでは彼の本来的な賃銀論の欠陥とは何か。そして彼の賃銀論は全体としてどのようであったのか。議論はその点に集約されていく。

それゆえ次のように展開したい。まず第五章の形式の区分を通じて二つの理論部分を析出する，そして各々の理論像の骨子をつかむ，次いで二つの像の論

理的関係を問うことを通じて，他諸章をも反省しつつリカード賃銀論の本来的な理論像を論定する(II)。次に，残る問題意識を析出し，その意義をさぐる(III)。最後に，彼本来の賃銀論の評価を試みるとともに，彼の賃銀論は統一的な全体像としては成立しえていない点を検討しそのゆえんを追究する(IV)。

[註]

① 近代が人間社会史に占める位置と意味については，K. Marx; Grundrisse der Kritik der Politishen Ökonomie. 高木監訳第一分冊77～80頁. 新MEGA版訳135～140頁，T. FERENC; Á TARSADALMI FORMÁK ELMÉLETÉHEZ. 羽仁・宇佐美訳『社会構成体論』，C. Gould; Marx's Social Ontology. 平野・三階訳『「経済学批判要綱」における個人と共同体』，など，また市場経済の歴史的特異性に着目しながら経済の自立化を説いたものとして，K. Polanyi; The Great Transformation. 吉沢他訳『大転換』，R. Heilbroner; The Making of Economic Society. 小野・岡島訳『経済社会の形成』，J. Hicks; A Theory of Economic History. 新保訳『経済史の理論』などをさしあたり参照されたい。

② 主としてイギリスにおける，近代「社会」分析の歴史の終局点が古典派経済学である，との判断による。なお，ドイツ古典学哲なかんずくヘーゲルに集約されるもう一つの近代把握の流れがある。

③ 何故リカード体系の論定・評価を志すか，それは二つの理由に依る。直接的な理由として，リカード体系とは主観的また客観的にどのようなものであり，どのような意義と限界をもつか，という点に関して従来の体系的研究（森耕二郎，堀，大西，中村各氏ら，また C. クレア，S. ホランダーら）になお追究さるべき問題が残っているのではないかということが一つ。もう一つは，<近代とは何か>という，我々にとって根源的かつ今日的な問題を解明していくに際し，学史的反省の対象の重要な一環としてリカードが位置していることに依る。このような意図をこめてリカード体系を考察していく。その第一着手として，本稿で，リカード賃銀論の論定，評価を課題とした次第である。

なお，リカード研究としては，経済理論体系に次いで彼の租税論体系が考察さるべきであろう。また本稿では触れられなかったが，リカードの経済的・政治的時論については吉沢①158～173頁，吉沢⑤などを参照されたい。

④ 資本の生産物たる一般商品相互間の関係はこの根拠の上で繰りひろげられるわけである。そしてリカードは彼なりに，資本と賃労働との関係および一般商品相互間の

関係という両者を，自己調整的運動を行うものとして，論述しているように思われる。（古典派なかんずく）彼が生産構造をともかくも捉えた，と言う場合，この二つの関係をどう捉えたかが評価の核心になるように思われる。つまり我々は『諸原理』第五・四章がリカード体系の客観的な核心であるとみる。本稿はこのうち前者を扱うものである。ただし，リカード体系の基礎にはもちろん価値論（第一（・二・三）章）があることを看過してはなるまい。なおリカードによる資本主義・発展的社会の把握をめぐり，第五章を特に重視されるのが吉沢氏である。我々とやや視角が異なるが，注目したい。

⑤ The Works and Correspondence of David Ricardo, edited by Piero Sraffa;『諸原理』は Vol. I.,『試論』は Vol. IV. 所収，全集からの引用は巻号および原典頁数を《I; 78頁》というように略記する。主として日本語版全集の邦語訳による。

II　二重の理論像

第五章の考察途中で吉沢氏はこう述べる，「リカードウの叙述は／論理の進め方が十分に整理されきっていないうらみがあり，したがって，論旨をたどることにかなりの困難を覚える。多少のよみこみを加え」ざるをえない，と（吉沢③70頁）。第五章解釈の困難さは，第五章の叙述・論理構成自体の混乱によるのではないか，我々は第五章構成を区分し整理することからはじめねばならない。便宜上第五章内の叙述箇所を段落（第三版に依る，全42段）別に指示していきたい。

まず大枠として，理論部分と応用部分とに区分できることは異論ないであろう。「以上が賃銀を左右し……を支配する法則である」とする36段が前者をしめくくり註①，次の37段からは救貧法の批判が展開されているのである。

次に理論部分についてであるが，この部分は形式的にみて大きく二分されうるように思われる，そして内容的な検討によって，その二区分は十分裏付けられるように思われる。順次検討していこう。

区分の手懸りは二つあるように思われる。堀経夫氏はこう指摘される，「わ

れわれの直ちに気づくことは」「章のはじめの五分の一あたりのところ（cf. Works, Vol. i, p. 97）から」「彼が，これまで厳密に守ってきた自然労賃と市場労賃との区別を棄てて，ただ労賃という一般語のみを使用するようになった，ということである」（堀①112～113頁）。すなわち1～17段で「労働の自然価格」，「賃銀の自然率」（第四章末尾に「自然賃銀」という表現もある），および「労働の市場価格」，「賃銀の市場率」，「労働の市場賃銀」という，労働の価格ないし賃銀率の二規定が頻出するのに対し，18～36段ではそれがほぼかげをひそめ，かわって「賃銀」なる用語が専一的にあらわれる。このような用語上のかなり鮮明な変化に着目することにより，17段と18段との間で一線を画すことができるように思われる註②。もう一つの手懸りは，第四章をめぐるいわゆる重章問題であって，これもまた17・18段間に区分を要請しているように思われる。みてみよう。

『諸原理』初版は，出版直前に二カ所章別編成を変更したことが知られている。ここでの議論に絞れば，スラッファの考証によって，執筆後の章分けの時点では「第四章　賃銀について」，「第五章　利潤について」とされていたであろうこと，だが校正の時点で前者を二分した方がよいと考えるようになり，急拠，旧第四章の前の方の一部分を分離し独立させたこと，それが「第四章　自然価格と市場価格について」であり，旧第四章の残る主要部分が「第五章　賃銀について」と章替えされたこと，従来どおりの「第五章　利潤について」と章が重複してしまうことを印刷終了後に発見し後者をとりあえず「第五章*」としたこと，が今日わかっている註③。だから当初の章分けでは，一般商品の価格論を扱う現行第四章が賃銀論に含まれていたことになる。とすれば，一般商品の価格論に次いで労働商品の価格論も同様に説かれてあることが推測されよう。そして事実現行第五章で，17段のところまで，「他のすべての物と同じく」，他の「諸商品と同じように」，労働の二つの価格が（時に一般商品の価格

論もまじえるかたちで――4，17段――）説かれているのである。このように，二つの手懸りはともに17・18段間に区分を要請していることがわかった。

それゆえ第五章は，先の大枠区分をあわせ次の三部分に区分しうるように思われる。

[1]労働の二つの価格を用いた議論部分（1～17段）

[2]賃銀の長期動向を説いた部分（18～36段）

[3]救貧法批判を説いた部分（37～42段）

このうち[3]は応用的議論であるから当面の議論から省くとして，以下理論部分の内容を具体的に検討していくことにしよう。上掲の二分（以下第一の像，第二の像と呼ぶ）に沿って，第一の像から整理していく。

まず冒頭文で，労働も，自然価格と市場価格とをもつことが言明される。次いで，労働の自然価格が検討されている。それは「労働者たちが全体として増減なく生活し種族を永続するのに必要な価格」であり，具体的には「労働者およびその家族の維持に要する食物，必需品，便宜品の価格に依存している。」これは概念規定といえよう[註④]。そのあと一般論ないし「一時」論としての上下運動が述べられる，労働の自然価格は「食物および必需品の価格の上昇／低下」とともに上下する，と。更に，長期論として上昇運動が説かれる，「社会の進歩とともに，労働の自然価格は常に上昇する傾向をもっている」。

次に労働の市場価格の話に移る。労働の自然価格とのいわば対抗関係のもとで述べられている点に十分注意したい。まず規定から。それは「供給の需要に対する割合の自然の作用から，実際に労働に対して支払われる価格のことである。」次いで需給現象の単なる結果を記述したのち，一時論としての上下運動が述べられる。労働の市場価格がその自然価格に対し上昇乖離し，のち低下一致するという運動がそれである。すなわち，資本が増加し労働需要が増えると「労働の市場価格がその自然価格を上廻る」，だがこの上昇した労働の市場価格

はいずれ「人口の増加」をもたらし，労働の市場価格は「再びその自然価格にまで低下」する（「時には反動のために実際それ以下に低下することもある」が，のちに回復する）。乖離に絡めて労働者の境遇も議論されている[註⑤]。そのあと，労働の市場価格はその自然価格を「たえず」上廻りうること，および「ある不足の期間」上廻りうることの二点が説かれている[註⑥]。

そして，労働の自然価格が実質的にはほぼ固定的であることが説かれている。

以上の第一の像をまとめるとこうなろう。

(1) 労働の自然価格を説明：規定，実質的にほぼ不変[規定の補足]，一般論ないし一時論としての上下運動[長期論の前提]，長期論としての上昇運動，の四点が説かれている（1～3，16段）。うち，主たる論述は第一，第四点であるといえよう。

(2) 労働の市場価格を，その自然価格と関連させて説明：規定，一時論としての上昇乖離のち低下一致の運動と，これにまつわる二つの議論すなわちその運動の繰り返しと乖離期間の差［一時論ゆえ，(1) の第四点とは併存しえない］との，都合四点が説かれているとみてよいだろう（5～15段）。主たる論述は第一，第二，第三点であるといえよう。

従って労働の二つの価格の運動に関する骨子としては，労働の自然価格の長期的な上昇運動と，労働の市場価格のその自然価格に対する一時的な乖離・一致およびその繰り返し運動，この二点を挙げることができる。

次に第二の像の整理に移ろう。まず18～20段で，賃銀は労働者需給因と生活品価格因という「二つの原因」に依り上下することが言明される。次いで労働者需給因のみに依り，つまり資本増加率と人口増加率との対比のみに依り賃銀の長期動向を説明する。すなわち，社会の自然的前進において，初期的には資本増加率が人口増加率を上廻るがゆえに「賃銀は／上昇する傾向をもつ」が「それは長くは続かない」。資本増加率は逓減するが人口増加率は一定のため，

一定時期より以降「賃銀は低下する傾向をもつ」，と。

次に，生活品価格を加味し総括的に賃銀の長期動向を説く。「我々は，賃銀は」生活品価格「に依ってもまた左右されるということを忘れてはならない。」生活品価格は長期的にみて上昇する。他方労働者需給因に依ればいわば後期においては賃銀は低下するのだった。「そうだとすれば，労働の賃銀が支出されるあらゆる商品が上昇しているのに，労働の貨幣賃銀が低下するようなことがあれば，労働者は二重の打撃をうけ，まもなく生活資料を完全に奪われてしまうであろう。それゆえ，労働の貨幣賃銀は低下するのではなく上昇するであろう。しかしそれは，それにより労働者が，慰安品と必需品とを，それらの商品の価格の騰貴以前に彼が購入したと同じ分量だけ，購入することができるほど十分には，上昇しないであろう」とし，長期動向として<貨幣賃銀上昇・実質賃銀低下：労働者境遇悪化>を結論づける。

以上の第二の像をまとめるとこうなろう。

(1) 労働者需給因のみに依り賃銀の長期動向を説明。当初上昇のち低下する(21～27段)註⑦。

(2) 生活品価格を加味し，総合的に賃銀の長期動向を説明。貨幣賃銀上昇，実質賃銀低下 (28～34段)註⑧。

従って骨子は，両原因を個々別々に考慮した上でいわば加算することにより賃銀の長期動向をみる，というものであるといえよう。

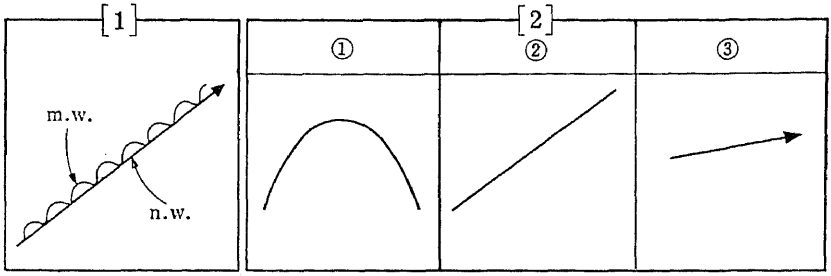
さて，以上第一の像と第二の像との整理を通じて，両者に説かれている内容が大分様相を異にしていることがわかってきた。となると次に我々は両者の論理的な関係を考察していかねばなるまい。議論の素材と対象，方法と体系，の二点において詳しくみていこう。

まず議論の素材と対象である。議論の素材ないし分析装置は，第一の像の場合労働の自然価格・市場価格であり，第二の像の場合賃銀上下の二つの原因で

あった。さて，この点を堀氏はこう述べる，「第一原因［労働者需給因のこと］／とは／市場労賃を左右する原因に外ならないし，また／第二原因［生活品価格因のこと］／は，自然労賃を左右する原因に外ならない」（堀①113頁）。吉沢③70頁，富塚158頁，中村①255頁なども同じ判断を下している。つまり，第一の像の労働の自然価格は第二の像の生活品価格因に，第一の像のその市場価格は第二の像の労働者需給因に実質的に対応（1，2段と20段，また5段と19段，が対応）し，同一の事項を意味していると言うほかないものと思われるのである[註⑨]。次に議論の対象を考えてみるに，第一の像では一時論と長期論との双方があるのに対し，第二の像では長期論のみがある。一時論のあるなしという点では異なるが，ともに長期論を扱うという点で議論の対象は同じである。重複していると言わざるをえない。しかも第一の像において，一時論は（繰り返すという点で）長期論に含まれてしまうとみることもできるから，そうなると，二つの像の対象は全く同じということになる。つまり議論の素材も対象も，実は，二つの像のあいだで実質的に同じなのである。そしてこのことは，労働の価格と賃銀とが同義であることを反省することによっても容易に再確認できる。同じ話になるしかない筈である[註⑩]。

では次に議論の方法と体系をみていこう。議論の方法ないし組立てとして，第一の像の場合労働の市場価格をその自然価格との関係において一時論として考察したのち，労働の自然価格で長期論をみていると言えよう。第二の像の場合，労働者需給因（労働の市場価格と同義）と生活品価格(因)（労働の自然価格と同義）とを別個に順次扱ったのち最後にいわば加算することで賃銀の長期論の結論を出している。他方，議論の体系ないし結果としては，第一の像では，乖離のち一致の繰り返しを従えた上昇論（生活品価格上昇がそのままあらわれる，実質不変）が，第二の像では上昇論とは言うものの名目上昇・実質低下（生活品価格上昇を下廻る上昇度）が示される。強いて視覚的に示せばこう

〈労働の価格＝賃銀、の動向〉



n. w. 労働の自然価格
m. w. 労働の市場価格
なお，吉沢④86頁Ｂ図を参照されたい。

① 労働者需給因のみによる賃銀
② 生活品価格
③ ①(の後期)と②とを総合した賃銀〔完成形〕

なろう（次頁図）註⑪。つまり議論の方法も体系も，二つの像のあいだで根本的に異なっていることがわかる。これはどういうことであろうか。同じ素材を用い同じ対象を議論しながら，でてきた体系は大きく異なってしまっている。となると秘密は方法の差異にありそうである。もう一度，よくみてみよう。労働の自然価格（＝生活品価格因）をともに長期上昇とみている点では二つの像は同じである。ところが，労働の市場価格（＝労働者需給因）を，第一の像では一時論として扱っているのに対し第二の像では長期論として扱っている。どうやらここに相違点があったようである。この点に絞って相違の根を更に追究してみよう。

労働の市場価格とは労働(者)需給にかかわるものであり，資本増加と人口増加との関連にかかわるものである。資本増加の方は二つの像で違いはない。だが，人口増加の捉え方が，実は異なっているのである。第一の像の当該部分について吉沢氏は述べる，「資本蓄積が独立変数，人口増加が従属変数とされている」（吉沢④85頁）と。資本が増加するからこそ人口の増加もみられる（逆ではない），また資本が要請した頭数どおりを，人口側は供出する。つまり資

本に対して人口は質的・量的に従属せる概念とされているのである（6～15段を吟味されたい）。他方第二の像ではどうであるか。「有利な事情のもとでは人口は25年間で2倍になりうると計算されている」，「人口［増加］力は常に同一でありつづける」，「労働者の供給は同一率で増加しつづける」，とリカードは言う。人口増加率一定説と言ってよい。つまり彼は第二の像では人口を独立概念・独立変数とみなしているのである註⑫。

以上を整理しよう。人口は，第一の像にあっては資本に従属する概念として，第二の像にあっては資本と独立な概念として解されていることがわかった。二つの像のあいだで，論理上根本的に異なっていたのは彼の人口理解だったのである。そしてこの差が労働の市場価格論の差としてあらわれる。労働の市場価格は，片や資本と人口との媒介概念として一時的に上下する（第一の像の場合）のに対し，片や資本と人口との別々の動向がもたらすところの結果概念として長期的に上下する（第二の像の場合）のである。そしてこの差が，最終的に二つの理論像の隔絶した違いとしてあらわれていたのである。シェーマ的に両者の差異を示すならば<二つの人口論→二つの労働の市場価格論→二つの理論像>と整理できよう。かくして，第一の理論像と第二の理論像は重複した関係にあること，否それにとどまらず両者は（人口論の違いに規制されるかたちで）矛盾する関係にあることがわかった註⑬。だが問題はまだ片付いていない。矛盾する以上，つまり第五章に二つの賃銀論が併存する以上，どちらがリカード本来の論理であるか，というよりもリカードに本来的な賃銀論はどのようなものであるか，論定しなければならない。これが本項の最後の作業となる。

矛盾の源たる人口論が焦点となる。もう一度様相の違いを浮き彫りにしてみよう。第一の像では人口は資本（増加）にあくまでも適応する。ところが第二の像では人口は資本（増加）から自由であり，双方の増加率を結果的に照らし合わせることにより人口過不足，それによる賃銀高低が導出される。人口過不

足状態の期間に焦点をあてて，この点を詳しくみてみよう。第一の像では人口過不足は一時的・経過的なギャップの問題にすぎず，基本的には人口<問題>はないと言ってよい。ところが第二の像では慢性的な人口過不足がみられることになる。すなわち，資本増加率が人口増加率を上廻る，社会の初期ないし前期では慢性的な「労働者の不足」状態が続き，のち下廻る，社会の後期には慢性的な「過剰人口」状態が続く（過剰化がすすむ）ことになる。ここに至って二つの像の相貌の対立はきわめて明瞭である。

さて，このように互いに相いれない二つの人口理解が，肝心の第五章では併存して説かれてしまっていることがわかった。それゆえ，今や，視野をひろげ，『諸原理』全体を通ずる論旨に添う人口理解と関連づけて，議論を進める場に立ち至ったように思われる。では実際に他諸章の関連部分を反省してみるとどのようであろうか。リカードは言う。「人口は，これを雇用すべき基金によって規制される，それゆえ常に，資本の増減とともに増減する」《Ⅰ；78頁》。「労働者の供給は，常に結局は，彼らを維持する手段に比例するであろうという論点ほど確実なものはない」《Ⅰ；292頁》。「仮に，労働維持のための基金が二倍，三倍，四倍になろうと，それらの基金によって雇用さるべき働き手の必要な数を確保するにあたってのいかなる困難も，まもなくなくなるであろう」《Ⅰ；289頁》。このような論述は彼が人口（増加）を資本（増加）に従属させて思考していることを示すものであろう。そしてこの点は，人口論に立脚した労働の市場価格論にかかわらせて追究していくならばより明瞭となるのである。「蓄積は，労働に対する需要の増加，ヨリ高い賃銀，人口の増加，原生産物の需要の増進……をもたらすであろう」《Ⅰ；79頁》「資本の蓄積は，当然に労働雇用者間の競争の増加をもたらし，その結果として労働の価格の上昇をもたらす。増加した賃銀は必ずしも常にただちに食物に支出されるのではなくて，最初は労働者の他の享楽品に向けられる。しかしながら，労働者の境遇の改善は，彼

に結婚する気を起こさせ，かつそれを可能にする，次いで，彼の家族の維持のための食物に対する需要が，彼の賃銀が一時的に支出されていた他の享楽品に対する需要に，当然取って代わる……」，「高い賃銀はまずはじめに労働に対する需要の増加から生じた，それが結婚を奨励し，そして子供たちを維持したがゆえに，それは労働の供給を増加する結果を生じた。」《Ⅰ；163頁》「人口の一般的増進は，資本の増加，その結果である労働に対する需要，賃銀の上昇によって影響される。食物の生産は食物の需要の結果にすぎない」，市場「賃銀が再び低下するのは，人々の数が増加するからである註⑭。」《Ⅰ；406～407頁》これらの因果連鎖をシェーマ化すればこうなろう，＜資本増加⇒賃銀上昇→人口増加⇒賃銀低下＞。ここでいう賃銀とは労働の市場価格であり，労働の市場価格のその自然価格からの上昇乖離，それへの低下一致がその運動である。そしてかかる労働の市場価格の運動を媒介として，資本が人口を質的量的に規制するという関係が明瞭に検出できる。このように，人口論，労働の市場価格論ともに，第一の像でみられたものが彼本来の論理だったのである。

従って我々はここに，リカードに本来的な賃銀論を論定することができる。改めて示しておこう。労働の市場価格のその自然価格に対する上昇乖離のち低下一致の繰り返し運動を随伴した，労働の自然価格の長期上昇運動，これである。労働の市場価格は一時的媒介論として処理されているとみてよいから，結局，自然賃銀長期上昇論とのみ言ってもよいだろう。

以上，はじめに第五章整理を行い二つの理論像を析出し各々の骨子をみた。次いで両者の論理的関係を問い，両者は各々自己完結的・排他的な理論像をなすものとして，矛盾する関係にあることをみた。それゆえ，特に人口論，従ってまた労働の市場価格論に注意を払うかたちで，『諸原理』全体を反省し彼本来の理論像を追究し，論定した。それは第一の像にほかならなかった。

さて，このように分析をおしすすめ，リカード本来の賃銀論を論定してみ

て，一つ気になることがある。確かに，論理的に追究する限り，第二の像は第一の像と峻別されねばならず，かつリカード自身の誤りとして処理せざるをえない。論理的混乱は排されねばならない。だが，それではリカードは何故混乱をおかしたのだろうか。第二の像を単にミスライティングとして片付けてしまっていいのだろうか。本来の理論像では処理しきれない＜何か＞を，彼は説こうとしているのではないだろうか。次に我々は，以上の分析では切り捨てられざるをえなかった，第二の像といういわばマイナスの面に焦点をあてて，彼の理論上の悩みを，彼の＜問題＞意識を立ち入って考察していかねばならない。

［註］

① 以下，第五章からの引用に限って，引用頁の指示は省かせていただく。

② もっとも，1～17段でも「賃銀」なる用語は少なからずみられるし，他方18段～36段でも一カ所賃銀の「市場率」，「自然率」区分がみられる《I; 102頁》。だが叙述表現の大勢としては本文で述べたような特徴を指摘することが許されよう。

③《I; xxiv～xxx 頁》参照。なお草稿時の状態については《I; xvi～xviii 頁》参照。

④ リカードの「労働の自然価格」規定はマルクスの労働力の価値に相当すべきものとして，だがそれに至ることができなかったものとしてある。この点の検討はIV項に譲りたい。従って本項では労働の価格ないし賃銀の上下運動に関するリカードの理解を検討することになる。

⑤ この，労働の市場価格はその自然価格に「一致しようとする傾向」をもつ，という議論が論理的には一時論であるという点については，彼は労働商品を一般商品と同様の論理で思考している，という点が論拠となっている。彼は一般商品について，市場価格の運動を「一時的価格変動」《I; 88頁》としておさえているが，労働商品も同様に考えているのであって，例えば382頁で「究極」と「一時」，との関係を商品価格について説く際，「帽子」と「人間」とを無差別に例示していることからもその点をよみとることができよう。また289頁のスミス賃銀論批判において，労働の市場価格の上昇を「一時的上昇」（つまり乖離・一致自体が一時的事態である）と述べているが，これもその点を裏付けるものと思われる。

⑥ ここで8～15段の解釈問題をみておかねばなるまい。我々はここでは，乖離し，のち一致するという運動論の枠内において，乖離・一致の運動が繰り返されるというこ

と，及び，場合により乖離している期間が異なること，この二点が説かれているとみる。

まず，8段でリカードは賃銀の市場率は自然率を「たえず上廻りうる」(may be constantly above it) と言う。ここで「たえず」の意味は，この箇所だけから判断を性急に下すと，長期的にずっと，ともとりうるが続く文脈から捉え返せば無理であろうと思われる。「というのは一度目 (an) の増加した資本が労働の新たな需要に与えた刺激が応じられるや否や，第二の (another) 資本増加が同じ結果をもたらしうるからである。」15段でも「資本が増加するごとに労働の市場賃銀は上昇するであろう」と言う。リカードにとって資本増加は必ず人口増加で応じられる。いわばその掛け合いで経済は進むのである。所与の自然率から一時的に上昇乖離する賃銀の市場率は，人口増加を引き出すための媒介的なインフォメーションなのであり，任務がおえれば必ずそのたびごとにもとの自然率に戻ってくる。上昇乖離し，のち低下一致するという一時的運動が繰り返されるということが述べられているものと思われる。「たえず」繰り返されるのである。

次に同じ箇所でリカードは，市場率は自然率を「ある不定の期間」(for an indefinite period)，上廻りうると言う。上方乖離の期間が「不定」であるという点で9～15段が展開される。生産性低下（ケース1），生産性不変（ケース2），生産性上昇かつ労働量の絶対的減少（ケース3）という三つの場合において，（いずれも一時的な上昇乖離ののち市場率は自然率に低下一致していくに違いはないが），一致までの所要期間は各々異なる。三態に異なりうるという点で単一な期間と特定できない。かかる意味をこめて，上方乖離の期間は「不定」である，と言うのである（表参照。なお吉沢③69頁図も参照されたい）。

		労働量（労働時間）	生産物量	生産物価値		価値変化	
				1個あたり	全体	1個	全体
従来		10	100(コ)	0.1	10		
今回	ケース1	18	150	0.12		↑	
	ケース2	15	150	0.1		—	
	ケース3	8	150	0.05	8	↓	↓

結局リカードは一時的一致論自体は何ら否定していないことがわかる。

なお，この二つの議論はともに理論的には誤りである。前者の議論についてはマ

ルクス『資本』667頁（MEW 版 Band 23）を参照されたい。累積的な資本蓄積の問題である。後者の議論については，労働の市場価格の運動と自然価格の運動とが，直接的には時点を異にすることによる。リカードは強引に同時点的に比較しようとしたわけである。

次に従来の解釈を反省してみよう。8～15段は，労働の市場価格論，具体的に言えば乖離・一致論（5～15段）のなかで説かれているにもかかわらず，従来は，この部分を5～7段から内容的に切り離してつかむ解釈が多かった。しかも8段と9～15段とが別々の議論であると解してしまうものが多い。簡単にみてみよう。

8段の解釈として，これは「進歩しつつある社会」（での二つの価格の関係）を論じている，注意すべきはこの社会では，乖離・一致運動は事実上否定される，とするものが多い。すなわち極限一致説とでもいうべき解釈が極めて多かった。自然的行程では市場率が自然率を長期にわたって上廻り続けるが，次第に収束に向かい極限期においてはじめて一致する，というのが基本的論旨と言える。中村①251～258頁（②，③も同じ），丸山 85～95頁，大冨 21～22頁などが典型的であり，堀①130～131頁もそれに近い。特徴的なことは，この説は21～27段（労働者需給からのみみた賃銀の長期動向の議論）とこの8段とを二重写しにしている点である。だが吉沢④86頁のB図で吉沢氏は，一致繰り返し論的な解釈を示された，我々はこの解釈を受け継ぐものである（ただし氏は，以前の②13頁，③66～68頁では極限一致説を採っておられた）。

9～15段については，ここで資本蓄積の二つのパターンが説かれている，といった大仰な解釈が少なくない，そしてこの部分が第五章区分の重要な一部分にいわば昇格されたりするのであるが，むしろ8段の「ある不定の期間」の具体的な議論とみるべきではないか。また，吉沢②14～15頁などは14段について「人口の大増加」は結局起きにくいから乖離は長く続く，と解される。26段が援用される点が特徴的である。だがこのリカードの論旨は逆なのであって，人口の大増加は必ず起こるのである。千賀 93～101頁は特異な解釈を示している。氏は先のケース1を「収入の資本への転化」，ケース2・3を「新しい事業部門の創設」とされる。その論拠は，後者の場合，労働雇用量増大は言えない，という点にある。だが我々の表で100コが150コに増えた以上リカードにとっては労働雇用量は増加するのである。なぜならリカードは，ここで生産物量増加を資本量増加すなわち労働需要量増大と考えているからである（10～12段）。

⑦ 21～27段の解釈について。文脈では，生活品価格因（労働の自然価格と実質的に同じ）はもともと議論に入っていない。にもかかわらず，従来の解釈は，労働の市場

価格は自然価格を上廻る……などと，両価格の関係論として読んでしまうケースがきわめて多かった。吉沢②11～12頁，中村①255～258頁，堀①131頁などがそうである。そして，あわせて既にみた 極限一致説 が主張される。解釈として疑問である。なお吉沢④ではこの箇所を含む第二の像の部分の紹介をほぼ全面的に省いてある。第二の像の理論展開を事実上無視するというこの措置にむしろ注目したい。

24～26段について。過剰人口国の二例のうち，発展的社会のかなり進んだ正常状態を意味する第二のケースの議論は理論的にみて誤りである。リカード本来の論理では，正常状態で過剰人口など起こらない。また自然的行程上にある社会状態に対して「救済策」，人為的「奨励」策を説くのもおかしい。自然的進行に抵抗し，それを食い止めようというこの議論は彼本来の論理にそぐわないのである。なお従来の研究（整合説）はこの点を不問にしていたように思われる。

また，14，16段あたりと合わせ，この26段から生活水準向上説を読みとろうとする解釈もあるが（内田 315～318頁，吉沢③73頁，丸山 92頁など）疑問である。

⑧ 28～34段について。まず28段で貨幣賃銀が上昇する必然性はない。のちの利潤率低下につなぐため，リカードは強引に上昇としたものと思われる。次に32～34段の例，直接には34段は実質賃銀低下の例示たりえないであろう（4，17段を想起されたい）点，多くの論者が指摘したとおりである（例えばブローグ①訳書48頁）。

リカードが実質賃銀をどう見ていたかについて，解釈がまちまちである。リカード自身上昇・不変・低下の三様のいずれをも説いていると考えられるせいに依るのであろうが，我々はリカード本来の論理によれば＜不変＞になると考える（IV項で検討する）。第二の像に登場した限り上昇・低下説はともに誤りであり，また16段を上昇説とみようにも，彼の理論構造には組み込まれえない以上，理論的には無効であると考える。

⑨ ここで「実質的に」と言ったのは，労働の二つの価格は第二の像での「賃銀」の論理レベルにあたり，賃銀の「二つの原因」という論理レベルとは一つずれる，という点を含んでのことである。なお異なった解釈もある。大西 182頁，森茂也①116頁，丸山 87頁，岡本 51号17～25頁，平林 87頁，時永 310頁など。

⑩ なお，いわゆる収穫逓減の法則は二つの像のどちらにも用いられていると考えられる。それは一方で穀物価格上昇・労働の自然価格上昇をもたらす（3，28段）とともに，他方で資本増加率逓減をもたらす（21～27段）ものとされている。この法則自体の検討は本稿では行わなかった。

⑪ 図[1] で，実際上しばしば人口はふえすぎる，という論点は，省いておいた。

⑫ 第二の像では人口増加率は一定であるのに対し，第一の像で敢えて対比的に言え

ば，人口増加率は逓減することになろう，なぜなら増加率の逓減せる資本に規制されるからである。

⑬ このように我々は第一の像と第二の像とは論理上区別され，かつ矛盾する関係にあるものと解する。第五章自体に混乱があったわけである。ところが従来の解釈の多くは第五章叙述を，また我々の区分による第一の像と第二の像との関係を何とか整合的・連続的に解そうとする姿勢を示した。（第二の像に主として依りながら）二つの像の個々の文節を取捨選択し二重の像をいわば相互滲透させて全体像をつくり上げる手法がそれである。

だが，かかる整合説では，二つの像の理論的内容をともに捉え損ね，かえって混迷を深めてしまうのではないだろうか。具体的に二点指摘してみたい。第二の像で彼は社会進展とともに実質賃銀低下すなわち貧困化を説く。（第六章での確認を除き）『諸原理』全体の論旨にこれが適合するであろうか。もう一つ，人口独立・増加率一定で過剰人口が進展した揚句，極限期に，人口は一体どうなるのだろうか。過剰化進展と言うほかない筈であるが，これは彼の極限期理解（人口最大不変）と異なってしまう。第二の像はリカード本来の論理に適合しないのである。本稿では，第五章解釈に関する整合説を排し，第五章自体の矛盾を検出することを，作業の不可欠の一環としている。整合説ではリカード賃銀論を論定しえないと考えたからである。

⑭『マルサス評注』や書簡なども参照されたい。例えば書簡では 20年9月15日付，9月26日付，10月3日付，21年9月9日付などが関連しよう。

Ⅲ　問題意識

第二の像は，資本と人口との増加率の結果的対比のみから賃銀動向を導き，生活品価格動向を加味し，改めて賃銀動向を出す，という理論展開になっていた。ここで，「改めて賃銀動向を出す」際，彼が労働者需給因から賃銀低下の方だけを取り出してきて前提した（27～28段）ことに注意したい。我々が「社会の後期」と呼んでおいた時期における事態である。なぜかかる一面的展開をしたのか。それはおそらく彼が＜現在のイギリス＞を念頭において議論をしているからであろうと思われる，そして＜問題＞を解く鍵も，実はここにあるの

である。詳しくみてみよう。

彼は現在のイギリスに貧困をみる。そして次のように理由を考えていったように思われる。人々が貧しいのは低賃銀のせいである，賃銀が低いのは労働需要に対し労働供給（人口）が多すぎるせいである，つまり資本増加率は逓減するのに人口はそれにおかまいなしに増えてしまうからである[註①]，と。このように，現在のイギリスの貧困をなんとか理論化すべく，彼はさかのぼって，人口を資本から切り離しその増加率を一定と理論設定したのである[註②]。彼の基底的な意識は貧困問題にあったのではないだろうか。あるいはこの点を，第一の像との根本的な対立点となった人口理解において捉え直すならば，彼の問題意識は「過剰人口」問題にあったと言うことができるのではないか。このように考えてみてはじめて第二の像の論述の不可避性に納得がいくのである。

第一の像の論理においては構造的・慢性的な過剰人口は説けない。だが彼はそれを説かずにすますことはできなかった[註③]。そしてそれを説くための立論装置が，既に述べたような，資本から切り離され増加率一定とされた人口理解だったのである。これにより，一定時期以降人口は過剰化の一途を辿ることとなり，過剰人口の説明はつく。従って次なる説明は，過剰人口ゆえに生ずる「害悪」を少しでもとり除くための「救済策」である。すなわち，嗜好を高め，早期結婚を抑制することによって，出生率を意識的におさえこむことが唱道されるのである。このように，いわば秘められた問題意識を明るみに出すことによって，第二の像の理論展開の強引さも合点が行き，また叙述展開（特に，前後の文脈を中断する24～26段）の不可解さも氷解するように思われるのである。

さて，このようにして析出した，過剰人口なる問題意識の理論的な意味は，それではどこにあるのだろうか。それは彼が，一般商品と同様の論理形式をもってしては説き尽せぬ＜問題＞を労働人口に認めた点にある，と言えるのでは

ないか。つまり，労働人口を安易に＜商品＞形式に解消しきれぬことすなわち労働人口の＜特殊性＞に気づいていたことを意味するものと考えられる。一般商品と労働人口との質的・根本的な相違を端的にあらわしたもの，それがこの過剰人口論である。我々はこのことのもつ重みを評価しなければなるまい。

だが，過剰人口の理論化の試み（第二の像）は，既にII項でみたように，失敗に終った。他方それは，本来の理論像にはもともと位置づきえないものであった。このようなわけで，過剰人口の問題は，理論化を要請しながら，結局応えられることがなかった。この事実はとりもなおさず，それに応えることのできない彼本来の賃銀論の理論構造の根本的欠陥を，はからずも暴露しているように思われる。ではその欠陥とは何か，この点を追って，次に我々はリカード本来の賃銀論の評価に移らねばならない。

［註］

① このように原因を求めていくのはむろんまちがいであるが，リカードはそう考えているのである。書簡から引用しよう，「貧困者の一切の不幸をたたえた大きな流れの源となっている，あまりに過剰な人口」《VII; 26頁》，「彼らの賃銀の不足に対する最も有効な対策は彼ら自身の手の中にある」《VIII; 184頁》，「我々の社会状態では，人口増加の傾向が，資本増加の傾向を超えている」《VII; 72頁》など。

② 「25年で倍加……」はスミスにもみられるが（An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations: Cannan edition. p. 62），スミスの発展的社会状態に，貧困（過剰人口）はない。だが，この貧困・過剰人口の議論は，周知のように，マルサスにはある。それゆえ，リカードの論理とマルサスの論理との関係をここでみておかねばなるまい。マルサス人口論とは，生活資料が質的・量的に人口を規制するというものである（人口増加制限を含む）。（An Essay on the Principle of Population, 1798） これに対しリカード本来の人口論は，資本が人口を規制し，人口が生活資料を規制するというもので，かつこの場合資本と生活資料とは同一視されていない。マルサス人口論と異なるのである。406頁で彼はマルサス人口論批判をさえ行っている。ところがリカードのここでの，すなわち第二の像での人口理解は著しくマルサス的色彩を帯びていることに注意せねばならない。まず，人口は

独立に一定の率で増加すると言う（20年9月9日付書簡では，かの「幾何学的比率」さえ言う《IX; 51頁》）。次いで，彼が資本増加力を農業生産力と同義的に述べ（21～23段），「人口が生存手段を圧迫」，「原生産物の供給率逓減」と述べる（24～25段）時，事実上，人口増加率が生活資料増加率を上廻るということを述べているとみるほかない。更に人口増加制限を述べる（24, 25, 39段）とあっては，マルサス人口論にきわめて近いものとなっていると認めざるをえない（さすがに露骨な，生活資料による人口規制，は説いていない点で，同一とは言えない）。過剰人口を説こうとして，その場合しかし資本（つまりは経済学）から自由なものとして人口を考えていこうとしてしまう限り，そのような，生活資料と対比する見地に陥ることは避け難いのかもしれない。このように現実（問題）との対応において試みた理論化がマルサスのそれと近似的であるにせよ，リカードは既に第一の像を説いている，という点を忘れてはならない。

なおリカードがマルサス人口論を用いたか否かをめぐる従来の解釈は分かれる。「全部的に是認／採用」（森耕二郎①131頁），「採用」（大西 177,193頁），「摂取し／礎石とした」（小林 161頁），「勿論／前提とされている」（安達 368頁），「完全に受け入れ」ている（M. ドブ，訳書 110頁），「重大な頼みとしている」（佐藤 44頁）などという採用・前提説が多数である。また，特定時点で現われる（吉沢④72頁），市場労賃のみにかかわる（堀①136頁），修正されて発現する（丸山 92頁），抽象的・可能的なものとして承認（中村③264頁）など条件付き肯定説もある。だがワーメル，訳書 222頁，城座 74～78頁，大冨 16～17頁など否定的なものもある（溝川73頁も参照されたい）。既に述べたように我々は，リカードの議論にはマルサス人口論に近接した考えもあるが（第二の像），リカード本来の人口論はそれと関係のないものと考える。

③ 第一の像で用いられていた労働の二つの価格が，どうして第二の像では用いられなくなったか。それは二つの像が議論を大きく異にしていることによろう。第一の像の論理では決して説明することのできない過剰人口問題，事実上これを説くべく構築された第二の像，という構図の中でこの点を推測できまいか。第一の像そのものに一体化してしまっている概念を，それとは根本的に異なる像の形成に際して，もはや用いることはできなかったのではないだろうか。その点幸いにも彼は，賃銀は二つの原因により上下する，という理解の仕方を以前からもっており，二つの原因が長期的にも賃銀動向を左右する，といわば水増し解釈をすれば，第二の像の形成に際しうまく用いることができるのだった。なお，二つの原因という考えについては1814年段階で別々に示しており（6月26日付と8月11日付書簡），『試論』を経て，

16年8月9日付書簡にて明瞭に併記されるに至る。

なおまた，彼は第三十一章「機械について」で，別の論理からする過剰人口論を説く。機械論について，本稿では触れられなかった。別の機会に検討したい。

Ⅳ 「全体像」

Ⅱ項で検討したように，リカード賃銀論の本来像は，労働の市場価格のその自然価格に対する乖離・一致（繰り返し）と労働の自然価格の長期上昇との二点から成っていた。リカード自身は，分配の長期動向を主眼とする関係上後者を重視したが，我々はリカードに対する体系的評価の核心として生産の自律的構造を主眼とするため，前者すなわち乖離・一致論こそを検討の対象とし，その理論的な意味を追究すべきであろうと考える。労働の市場価格のその自然価格に対する乖離・一致論を，ではどのような視角から分析していくか。一つには両価格間の運動のもつ意味を，両価格の概念規定においてみていくことが必要となろう。もう一つには，両価格間の運動の意味をその内実すなわち人口（更には資本の蓄積様式）に関する彼の考えにおいてみていくことが必要であろう。それゆえ以下の二点で，まず彼本来の賃銀論の評価を試みてみよう。

(1) 労働商品の自然価格と市場価格について

リカードのいう労働の自然価格（以下第一規定とも呼ぶ）とその市場価格（第二規定とも呼ぶ）とは直接的には<基本・実際>という関係にあると言ってよい。現実に支払われるのが市場価格であるのに対し，自然価格は通常生活費をまかなうに足りるだけのいわば内的目安といった関係にあるからである。「現実的賃金／観念的賃金」（大西 182頁）と言うのも同様の意味をさすものと思われる。では，それは理論的にはどのような意味をもつのだろうか，考えてみよう。

リカードは一般商品と同様に労働商品の価格についても，需給関係が一時的には影響を及ぼすが究極的には「人間の生活費」《Ⅰ；382頁》が価格を規定する，と言う。<究極的・一時的>という関係で捉えられているとみてよい。これは一方で時間・歴史性において<長期動向・一時変動>という関係を意味する（Ⅱ項では主にこの面が焦点となった）とともに他方，論理性において<本質的・現実的>という関係をも事実上意味していると評価することができよう。第二規定が第一規定に（繰り返し）「一致」すると言う場合の理論的な意味は，第一規定が第二規定を規制するという点にあるとみてよい。第一規定の第二規定に対する論理的な優越性・主導性は明らかであり，その論理的な意味を最大限探るならば，第一規定こそが本質的な概念であり第二規定はそれに従属せる現実的な概念である，とこのように捉え評価していくことができるのではないか[註①]。

だが，リカードは二規定の質的関連をそれ以上捉えようとしない。つまり二規定を，本質とその現実形態及び媒介現象といった論理レベルの差として追求し叙述することがない。そのような方向性に進みえない理論構造になっていると言わねばならない。それではどのような理論構造になっているか，そしてその欠陥はどこにあるか，更に詳しく調べていこう。

リカードは第五章冒頭において労働に自然価格と市場価格という二規定を与えた。注意されたい，与えられたのは二重の価格規定である。二規定は<価格>という論理レベルに併存するものとして同質的・同格的なのである。このように，論理のレベルが平板的であるということになると，第一規定の第二規定に対する質的上位性を認めることはできないことになる。いかに第一規定の第二規定に対する本来性・優越性を強調しようと，それは相対的な，程度の差にとどまるにすぎなくなる[註②]。<二>つの価格，<二>つの原因という場合の>二>という数字自体が端的にその点を体現している。欠陥はかくして，労働

の自然価格規定にこそあったのである。

ではなぜこのような平板構造とならざるをえなかったのであろうか。それは彼の労働商品理解にあると言ってよい。

<労働>商品を考察することとなれば，商品価値の実体を労働に求めるリカードにとって，<労働の価値>を規定することは悪無限に陥るものとして，どうしてもかわさねばならぬこととなる。彼が「労働」と「賃銀」とを相互滲透させたり，労働商品の価値をないがしろにしたままただちに価格として規定せざるをえなかったのもこのゆえである註③。とすれば労働の自然価格規定の欠陥は実はヨリ深い彼の欠陥（労働商品なる把握）に依るものであることがわかる。

このように，労働商品理解が根底にあり，それゆえに労働の自然価格の規定がゆがんだことがわかった。ところで，この規定の欠陥は一つの具体的な欠陥をもたらす。すなわち労働の自然価格規定の欠陥は具体的には実質賃銀不変なる帰結を導くのである。リカードにとって労働需給問題は所詮労働の市場価格の話，他方通常生活費はあくまでも労働の自然価格の話，と振り分けられたまま内的関連をつけることができないため，需要動向が現実の価値（リカードにとっては自然価格に相当するしかない）に影響を及ぼすことはない。需給ギャップに基づく高賃銀はのちに解決されていく(低下する)ものとして，自然価格の中には決して繰り込まれていくことがない理論構造になっているのである。

以上我々はリカードによる労働の価格の二規定の関係を論理的に検討することを通して，労働の自然価格規定自体の欠陥とその運動論の欠陥とをみた。だが他方において，その市場価格の運動論についても欠陥が認められるのである。この点を解明するには我々は次の論点に移っていかねばならない。

(2) 人口の存在様式及び資本の蓄積様式について

リカードによれば，資本の増加が労働の市場価格を上昇させ，一定の具体的

経緯ののち，人口の増加が帰結される。資本ないし社会が要請するだけのそのつどの頭数を，一定のタイム・ラグを不可避とするものの供給側は常に揃えて供出する，という意味であるととってよい[註④]。これは資本が質的にも量的にも人口を一義的に規制するということであり，既にみたように人口は資本に対する従属概念かつ従属変数であるということである。そしてこのように資本による人口規制のみを一義的に主張することは，彼の人口論の意義と同時に限界をも，実はさし示しているのである。

確かに，資本による質的・量的な人口規制の関係は本質論的把握として十分評価しなければならない。だがかかる一義的・一方的な，平板的な論理による主張は人口に関する次のような独断をもつものと言わねばならない。すなわち資本による需要に対する，人口の<自然増による無限適応>がそれである[註⑤]。この，リカードの自然的人口論の特質は，何か。それは，人口自然増という自然論的な契機を論拠とすることにより，労働商品を一般の通常商品と同等・同質的にみてしまうことにある。需要増加に対して，一般の通常商品ならば（一時的な利潤増加を媒介として）いわばワン・テンポのちに供給増加をしていける。労働商品は，彼によれば，（一時的な賃銀増加を媒介として）いわばツー・テンポのちに適応していけるのである。少しばかり需給適応の鈍い性質をもつ商品として，一般商品との差異は量的であるにすぎない。それどころか，「他の多くの物と同様，金，家屋，労働の場合には」市場価格の自然価格に対する一致はすみやかにはもたらされない，と言う時，労働商品の一般商品に対する差異は完全に消されていると言うほかない《Ⅰ；196頁，なお191頁も参照》。つまりは労働を物とみていることを意味する。しかも彼は「労働者の供給と需要」とも言う。労働，また労働者を物と見，商品と見ているのである。だが労働者はもちろん，労働も物ではない。また，物でない以上資本による要請に無限に適応していけるものでもあるまい。人口は，時には増加要請に十分対応で

きなくなり，資本増加に対するネックとなって逆に資本の運動を制約することもありえよう。こういった議論は彼の，資本による人口の一義的規制論には入りえない。誤りの根源は，労働人口を物として扱う彼の理論構造そのものにあったのである。

従って労働の市場価格の軌跡に関しても，価格は一定程度上がったのち，人口増加とともにいわば自然的・自動的に低下していってしまう。事態の緊張は起きないのである。

資本の蓄積様式の論点は，人口に関する上述の論点といわば表裏の関係にあると言ってよく，相互的な議論であるから長きを要しないだろう。既にみたように資本増加は，一定のタイム・ラグこそ要するものの人口増加によって無制限に応じられるのであって，蓄積は労働需要増加を常に伴うワン・パターンであると言ってよい。確かに労働需要の増加を伴う蓄積パターンが，資本の蓄積様式のいわば基本的形態であると言ってよく，基本を捉えているという点では評価しうるとしても，この蓄積パターンだけということになるとむしろ欠陥を指摘せざるをえない。労働人口の相対的欠乏という事態に直面して，資本は別の蓄積パターンを不可避的に採ることにもなるのであるが，こういう論点は入りえない理論構造になっている。先の人口把握のゆがみがここでの資本の蓄積運動の把握をもゆがめているのである。だから，リカードにとっては<生産力と生産関係>との矛盾運動もない。あくまでも一面的・平板的である[註⑥]。

(3) 小　括

まず(1)～(2)を通じて明らかになったことを改めて示してみよう。第一に労働の価格論としては，<本質的規定・現実的規定>という論理関係が認められたが，あくまで同質の論理レベルにとどまり，この点労働の自然価格規定に欠陥があったことがわかった。第二に人口論としては，資本による人口規制という根本的関係が認められたが，人口が逆に資本を制約する面が欠落しており，

人口の自然論・物論に欠陥があったことがわかった。第三に蓄積様式論としては，労働需要増加を伴う様式という，蓄積の基本的形態が認められたが，人口論の欠陥ゆえに，蓄積様式の一面的な単調な把握，という欠陥があらわれていた[註⑦]。

総じて，理論の<原理>的性格をよく捉えているものの，層次的な論理展開を捉えることができていない。つまり本質論的把握が無媒介的（だから直接的・一面的）になされている。そしてかかる意義と限界との源は，彼が<労働商品>を扱っていることによる。その扱いは一方で<商品>の性格分析として威力を発揮するが（「意義」としてみたもの），他方で<労働>を商品とみてしまう，または<物>と同一視してしまう，という致命的欠陥（「限界」としてあらわれたもの）をもつのであった。

では，このような意義と限界とをもつ労働商品論（第一の像）を，先にみた過剰人口論議（第二の像）とあわせて，リカード賃銀論が全体としてどのようなものとしてあるのか，最後に考察していこう。

(4) リカード賃銀論の「全体像」

既にみたように，リカードは過剰人口論の理論化に失敗した。だが理論化に失敗したとはいえその問題意識は，労働商品論に対する根本的な異議を申し立てていたのであった。彼の労働商品論は，一般商品論と同様の論理形式をもって，労働に関する需給を処理するものであったと言うことができる。一般商品と同様の処理形式，という点で極端に走ってしまっていると言えるのではないか。そして，そうであるがゆえに彼は，過剰人口という現実的な問題を議論するにあたって，慢性的・構造的な過剰人口の存在という点に着目することにより，いわば逆の極端に走ってしまった，と言うことができるのではないか。このいわば反動は，基本的論理として，労働商品論が先に説かれているがゆえの事態である[註⑧]。そしてこの二極分裂は，リカード賃銀論の論理の枠組みでは

遂に解決をみることができなかった。

それは何故だったのだろうか。それは彼本来の論理である労働商品論の狭隘性による。それではその欠陥自体は一体何に由来しているのか，なにゆえにそういう把握が不可避となったのであろうか。我々はその根因を追って，再び彼（に代表される古典派経済学者）の近代把握を検討していかねばならない。

彼は近代の直接的な特質たる経済の自立性・自律性を捉えた。それを示すのが『諸原理』であり，その経済理論諸章であり，更に言えば彼の経済構造論であった。だがしかし，彼は近代の本質を把握することはできなかった。近代とは何か。近代とは，人間の命が，人間から離れてしまっている時代である。それは，永らく自然に埋没していた人間の生存様式の中から，一定の（外的）諸条件に迫られて，質的に新たに形成された社会的人間力が，旧来の人間関係を根底的に突破したことによる。人間力は，固定的に客体化され，物化されることになったのである[註⑨]。マルクスはかかる事態を疎外された労働として，のち労働力の商品化として，根底的につかんだ。

だが，リカード（を頂点とする古典派経済学者）はこの点を歴史的にも理論的にも，把握することができなかったのである。だから彼は労働力をも資本をも捉えることができない。そしてこのことは具体的には，資本が，自らの産物でない労働力をいかなる媒介性において自己の運動のうちに包摂するか，という論点を彼がみごとに欠落させているという欠陥としてあらわれる。彼の場合，むしろ資本は労働＝労働者を直接的に包摂してしまう。すなわち，彼は労働商品を，むしろ積極的に，資本の生産物と同様のものとして議論し処理してしまうのである。それが彼の労働商品論なのである。むしろ彼こそ＜唯物論＞の経済学をうちたてたと言ってよい。資本にとって，すなわちリカードにとって，労働力は何ら＜問題＞ではなかったのである。

労働の自然価格規定も，自然的人口論（及び資本蓄積のワン・パターン論）

も，みなこの，労働商品という現象論的な把握からくる謬見とみてよい。そしてそれは彼が労働力の商品化という近代の根源的事態を，だから資本と労働力（賃労働）との関係を，つまり資本家的生産関係を，何らつかむことができなかったことに依るのである。労働商品理解こそは彼が，商品化された労働力という事態を，すなわち近代を，あるがままの現象においてのみ捉えているということの，端的な証しであると言わなければならない。

彼の近代把握の現象性が彼に資本関係理解を欠落させ，それが彼の労働商品論を生んだ。彼の賃銀論は，このようにして成立した労働商品論を本来の理論像とし，それへの反対の極に揺れた過剰人口論議をいわば理論的死重として伴わざるをえないものとなっている。リカード賃銀論の全体像が，理論的統一性において成立しえなかったのはその必然的な結果だったのであると言わなければならない。

（1982年6月）

［註］

① リカード賃銀論は端的に生活品価格説ということができる。これに対しスミス賃銀論は労働需要説である。確かに生活品価格も若干の影響はもつものの，これは基本的には単に形式的に賃銀の貨幣額を決める役割をになわされているにすぎない（Smith. ibid. Book I. Chap. VIII; Book V. Chap II. Part II. Article 3d.）。未だ現象的と言うほかない。マルサス賃銀論は当然労働需給説である（Principles of Political Economy, Chap. IV. 1820）。この点で，両者に対するリカードの優位は画然としている。トレンズ賃銀論は，「労働の自然価格」，「その市場価格」という概念をはじめて提示したほか，乖離と不断の一致傾向を指摘した点ですぐれている。が，彼は労働の自然価格に需給均衡的意味をもたせている点でなおリカードに及ばない（An Essay on the Influence of the External Corn Trade, 1815）。

② リカードは第一規定の第二規定に対する本来性・優越性をなんとか示そうと努力する。第一規定から需給論的性格を排斥し，二規定を峻別し別々のものとみようとする態度にそれはあらわれていると言ってよい。「増減なく彼らの種族を生存させ永続させるのに必要な価格」なる表現はこの点を示すものと思われる（中村②250頁，③256頁を参照されたい）。我々はこの点に意義を認めたのである。しかしそれは一

定の限界を伴ってのことにすぎない。単なる量的な上下関係としての，乖離・一致運動論こそ，労働の二つの価格論の意義と限界とを端的に示しているのである。

③ リカードのトートロギー，労働と賃銀とを混同することの誤り，などを指摘した文献として，S. Bailey; A Critical Dissertation on the Nature, Measures and Causes of Value, 1825 鈴木訳『リカアド価値論の批判』第三章が古典的に有名である。

確かにリカードは，第一章で「労働の価値」《I; 15頁その他》と言うし，事実上労働力の価値規定を知っているといえなくもない（この点例えば，岡本 49号47～49頁や羽鳥 98～102頁その他参照されたい）。だが15頁の労働の「価値」は価格の意味で用いられているにすぎない。明確につかみえていないからこそ彼は＜二つの価格＞，＜二つの原因＞などという平板的な論理に終始せざるをえなかったのである。むしろリカードの限界を指摘せざるをえない。この点を不問にしたまま，労働の価値は第一章で済んでおり，第五章ではもともと労働の価格＝賃銀を扱う所なのだから……などとリカードを弁護する（例えば岡本49号を参照されたい）ことはできないと我々は考える。

④ 藤岡氏はこの点を「人口ラグ」，「無限の弾力性をもつところの長期供給曲線」と表現されている，参照されたい（291，287頁）。

⑤ リカードは人口に自然増のみをみる。これが人口独立説と結びつくと，第二の像（における人口増加率一定説）が登場するわけである。

⑥ 人口論・資本蓄積様式論としてはリカードはスミスと大差がないように思われる。この点に関する新たな議論の展開はバートン（Observations...., 1817）を待たねばならない。

⑦ リカード賃銀論の帰結として，景気循環論の欠如，が不可避となる。彼の理論は一様な経済成長論と言ってよい。この点の検討は続稿に譲るしかない，なお大内論文を参照されたい。

⑧ 明快な論理，そうであるがゆえにはみ出してしまう問題，だがそれをも執拗に拾おうと努める彼の意識，我々はここにリカードの意外なバランス感覚をみる。だが論理の統一的全体性は，これによって脆くも崩れ去るのであった。

⑨ ＜近代＞論については，別の機会に改めて考察したい。[[何故今日，改めて〈近代〉を問直さねばならないか。それは，展望を失ったまま混迷を深め，腐乱し，構造的に反人間的な情況を全面開花させてゆく今日の世界こそ，近代および近代主義の，まぎれもない帰結であると考えることによる（前近代性の問題もある）。今日（現代）を考えるということは，ヨリ根源的には，近代を歴史的・理論的に問う，ということであると，我々は考えるのである。]]

参 考 文 献

本稿で利用したリカード賃銀論に関する引用・参照文献

1. リカード賃銀論を詳細に扱った文献

・吉沢芳樹「発展的社会把握における リカードウとマルクス」(内田義彦他編『経済学史』別冊，1970年) [以下吉沢②と略す，以下同様]

「経済学の成立(2)」(富塚良三編『経済分析入門』第四章，1972年) [吉沢③]

「マルサスとリカードウ」(共著『経済思想史読本』第三章，1978年，ただし『経済思想』1977年初出) [吉沢④]

・堀　経夫『リカアドウの価値論及びその批判史』第二篇第一章 1929.

『理論経済学の成立』第四章　1958年[堀①]

・中村広治『リカァドゥ体系』後編第7章第1節．1975年[中村①]

「古典学派の理論的展開」(杉原四郎編『講座経済学史Ⅱ』第2部第2章．1976年) [中村②]

「リカァドゥの資本蓄積論」(高木暢哉編著『経済学史の方法と問題』第三編第四章，1978年) [中村③]

・丸山武志「リカァドゥの賃金論」(「経済学雑誌」78巻3号．1978年)

・岡本祐次「リカードウの賃金論について」(「三重法経」44.49.51号．1979～1981年)

・大西信隆『リカード新研究』第五章　1969年

・大冨博次「リカードの資本蓄積論と賃金論」(「経済学研究」11号．1982年)

・森耕二郎『労賃学説の史的発展』第三章．1928年[森耕二郎①]

2. その他の引用・言及文献

・安達新十郎『地代論史の研究(上)』第八章．1978年

・内田義彦『経済学史講義』六．1961年

・大内秀明「リカアドウにおける産業循環論の欠如について」(「明治学院論叢」56巻2号．1960年)

・小林時三郎『古典学派の考察』第五章　1966年

・佐藤謙三「古典学派の賃金理論」(「東北学院大学論集(経済学)」37号．1960年)

・城座和夫「古典派賃銀論の形成・発展・解体」(「経済と経済学」23・24合併号．1968年)

・千賀重義「リカードゥ資本蓄積論の再検討」(「松山商大論集」24巻3号所収の入江奨記録「リカードゥ研究」に収録，1973年)

・時永　淑『経済学史・改訂増補版』第二篇第二章．1971年
・富塚良三『蓄積論研究』前編第二章，1965年
・羽鳥卓也『リカードウ研究』第二章，1982年
・平林千牧「リカード『経済学および課税の原理』」（伊藤他編『経済学の古典（上）』4．1978年）
・藤岡孝四郎「古典派賃銀論」（青山秀夫編『分配理論の研究』1964年）
・溝川喜一「古典学派（II）」（小林昇編『経済学史』第5講．1967年）
・森　茂也「リカード『経済学原理』章別編成と分配論における需給論」（「アカデミア」49号．1975年）［森茂也①］
・吉沢「古典経済学の完成」（出口勇蔵編『経済学史四訂版』第四章第三節．1953年）［吉沢①］
「リカードウの議会改革論と経済学の分析視角」（「専修経済学論集」6号．1968年）［吉沢⑤］
・M. Blaug., Ricardian Economics. 1958. 馬渡他訳『リカァドウ派の経済学』［ブローグ①］
・O. Clair., A Key to Ricardo. 1957
・M. Dobb., Theories of Value and Distribution since Adam Smith. 1973. 岸本訳『価値と分配の理論』
・S. Hollander., The economics of David Ricardo. 1979
・M. Wermel., The Evolution of the Classical Wage Theory. 1939. 米田他訳『古典派賃金理論の発展』

★なお本文，註で既に出典を示した文献はここに掲示しなかった。

3．リカード賃銀論に関する，直接的な参照文献

・井村喜代子「D．リカードの『賃労働』問題の分析視角」（「三田学会雑誌」49巻4号．1956年）
・梅村又次「古典派賃金理論」（『賃金・雇用・農業』所収．1961年．初出1957年）
「リカード賃金理論に関する一研究」（「一橋論叢」44巻5号．1960年）
・大内「供給サイドの経済学の源流」（「経済学」43巻4号．1982年）
・小黒佐和子「リカード経済学における人口法則・蓄積論の構造」（「明治学院論叢」30号，1969年）
・鎌倉孝夫『経済学説と現代』第三章第一節．1979年
・白杉　剛「リカード蓄積論における賃金変動モデル」（「甲南経済学論集」22巻4号．1982年）．

・杉山俊治「賃金理論と人口論」(「アカデミア」24号，1959年)
・筒井　徹『リカード研究』1973年
・西村達夫「再生産論よりみたリカアドウ」(「東北学院大学論集(経済学)」37号．1960年)
・美濃口時次郎「賃金理論におけるリカアドとマルクス」(「経済科学」11巻1号．1963年)
・森耕二郎「リカァド価値論の研究』本論第三編第二章．1926年
・森　茂也「リカードの需給論」(「南山大経済学部創設記念論文集」1961年)
「リカード分配論の基本構造」(「アカデミア」55号．1966年)
・渡会勝義「リカードウの基本モデルについて」(1980年11月学史学会報告)
・A. Amonn., Ricardo als Begründer der theoretischen Nationalökonomie. 1924. 阿部他訳『リカアド』
・M. Blaug., Economic Theory in Retrospect. 1962. 久保他訳『経済分析の歴史(上)』
・Hicks & Hollander., Mr. Ricardo & the Moderns. (Q. J. E., 91-3. 1977) 岡田他訳「リカードと現代経済学」(「季刊現代経済」30号．1978年)